

# 第21回 日本外来臨床精神医学会 学術大会

2021年12月5日

於 立正大学品川キャンパス 石橋湛山記念講堂

# 理事長挨拶

日本外来臨床精神医学会 理事長 里村 淳

2020年4月7日、新型コロナ・ウイルスの感染拡大を防止するために最初の緊急事態宣言が発せられてから1年8カ月が経つ。「新型」の意味は、たんに新しい種類を意味するだけでなく、これまでの感染症学が通用しない、それだけでは対応できないという意味であることが段々分かってきた。たとえば、集団免疫が完成すれば収束するなど。そのような意味では、「新型」うつ病と似ているところがあるのではないかと。それはともかく、コロナ禍は人々の生活をおおきく変えてしまった。人と直接会うのを極力避ける、大勢の人が集まるのを避けるといった、いわゆる「密」にならないようにすることが生活の基本のようになってしまったのである。その結果、いわゆる「在宅ワーク」、「テレワーク」といわれる、出社しないで自宅で仕事をする働き方が大幅に導入されるようになった。それは、会議、出張にも及び、しかも、このようなあり方が感染収束しても、つまりポスト・コロナになっても続くことがわかってきたのである。これまで、人は人と直接会い、直接意見を交換し、それによってお互いを理解し関係を深めていくことが良いことであると思ってきたが、これからはかならずしもそうでないようである。心理職の世界でもZOOMを使ってカウンセリングを行うことは、今では普通になりつつあるようである。時間と交通費をかけてわざわざ行かなくても済むことをメリットと思うクライアントにも出会うようになった。精神科医療の世界でも、いずれは、オンライン診療は日常的なものになっていくようである。

産業医にとって気になるのは、このような、社員同士の直接のコミュニケーションが少なくなり、そればかりではなく、仕事以外の交流とそれによってもたらされるプラスの要素にあまり価値を置かなくなってきた気配がする。最近のアンケート調査では、仕事が終わってからの社員同士の飲み会は必要ない、忘年会は必要ないなど、仕事以外の付き合いは不要と考える人が多くなっているのである。これによって職場の文化はどうなっていくのであろうか。また、仕事を先輩から教わり、いろいろな経験を積んで社会人として成長していく過程はどう担保されるのであろうか。

このような働き方の変化や価値観の変化は、ポスト・コロナの時代になってどういう弊害を職場にもたらすのか注目である。

2021年12月5日